ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第20号　2016年8月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　築103年目の学生寮の保存・活用をめぐって	冨岡　勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（20） ―原胤昭（たねあき）と原女学校―	神辺　靖光	4
大泉学園都市、小平学園都市、国立学園都市 ―学園都市建設への飽くなき夢―	谷本　宗生	7
近代日本における大学予備教育の研究⑳ ―早稲田大学附属高等学院の特修科②―	山本　剛	9
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（20） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（16）：島根県（8）・鳥取県(3)	吉野　剛弘	14
大阪市の女子教育⑪ ―西区女子手芸学校の教育方針―	徳山　倫子	19
東京帝国大学実科の教育内容 ―学科課程の変遷②―	松嶋　哲哉	23
学生寮の時代⑪ ―旧制中学の寄宿舎（寄宿舎にかかわる職員たち）―	金澤　冬樹	28
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑧ 女子英学塾の宗教教育①	ママトクロヴァ・ニルファル	32
アクティブ・ラーニングに思う（承前）	小宮山 道夫	36
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（18） ―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その2)―	冨岡　勝	38
≪お知らせ≫学際シンポジウム　近代日本の日記文化と自己表象		41
刊行要項（2015年6月15日現在）		43
編集後記		44

コラム
築 103 年目の学生寮の保存・活用をめぐって

冨岡（とみおか）　勝（まさる）
（近畿大学）

北海道大学恵迪寮、東北大学明善寮、東京大学駒場寮（現存せず）、京都大学吉田寮を指して「四大自治寮」という呼ばれることがあるようだ。このうち唯一、1913年（大正2年）に建築された吉田寮の建物が築103年目の現在も学生の生活の場として使われている。

7月16日～17日にこの吉田寮で「場×文化×吉田寮　会議船バッブンカッ！の航海訓練」[1]と題した催しが開催された。吉田寮では新棟が2015年に建築されたが、現在も使用中の築103年の寮棟（以下、現寮棟と表記）をめぐって、耐震性も含む大規模補修による保存活用を主張する寮自治会と、「耐震性を著しく欠く」として寮自治会に入寮募集停止を求める大学側との間の交渉が難航している[2]。今回の催しは、こうした状況のなかでも少し立ち止まって「場所を作り出すこと、場所で生きていくこと、場所のなかで何かを生み出していくこと―それらは、どういった営みなのか」（プログラムより）について考えていくという趣旨で、様々な企画がおこなわれた。筆者は「吉田寮に思いを寄せるディスカッション」や、尾池和夫氏（地震学者・俳人・元京都大学総長）の地震学の見地からの講演「変動帯の文化として吉田寮」などに参加した。建築学・地震学を含む様々な意見・アイデアが飛び交い、あらかじめ一定の結論を前提とするのではなく、様々な角度から「場」についての考えの幅を広げていこうとする催しであった。

1913 年に建てられた京都大学吉田寮の正面玄関

筆者は1983年から約6年間、この吉田寮で生活したが、当時は歴史的学生寮の保存・活用というアイデアはまだほとんど語られていなかったと思う。事態は不透明であるが、もしも現寮棟の大規

模補修による保存・活用が実現したら、それはどのような意味があるだろうか。

2015年5月には一般社団法人日本建築学会近畿支部より、建築学上の観点から「京都大学吉田寮の保存活用に関する要望書」が京都大学総長宛に提出されている。この要望書によれば、木造2階建て3棟の現寮棟は、文部省の技師であり、学校建築の建築家として著名な山本治兵衛と永瀬狂三によって設計されており、大正初期の木造寄宿舎の様子を伝える歴史的建造物である。さらにこの建物は、1889年竣工の第三高等中学校の木造3階建て1棟の寄宿舎が2階建てに再構成されたものであり、寮食堂は第三高等中学校時代の形状を保ったまま再建されたという。つまり、1889年竣工の第三高等中学校寄宿舎の記憶が建材や寮食堂の建物に刻印されているということになる。こうした歴史をもつ現寮棟が今後何十年も現役で存続するとすれば、建築学的な意味は小さくないだろう。

また現寮棟を保存・活用していくことは、現各時代の学生たちが、自分たちの生活の場について様々なことを話し合い、問題解決を続けていった学生文化の場を動態保存していくことも意味するだろう。未来の現役寮生たちと各世代の訪問者たちが寮生活や寮自治について、開かれた対話ができるような工夫があれば、動態保存の文化史的な意味はさらに大きくなるだろう。例えば吉田寮に関する史資料の収集・保存・公開・活用をおこなう「吉田寮アーカイヴズ」を寮内に設けたり、寮内外から幅広い人が参加する寮史研究の継続的な公開研究会を吉田寮内で開催することなども可能かもしれない。

おそらく日本では大変珍しい歴史的学生寮の動態保存の試みとして、吉田寮の保存・活用をめぐる動向に注目していきたい。

[1] 「場×文化×吉田寮　会議船バッブンカッ!の航海訓練」
https://www.facebook.com/%E4%BC%9A%E8%AD%B0%E8%88%B9%E3%83%90%E3%83%83%E3%83%96%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%83-605550739604061/

[2] 詳細な事実経過や大学・吉田寮自治会の双方の文書などが、「吉田寮公式サイト」において整理・紹介されている。
https://sites.google.com/site/yoshidadormitory/zui-jinno-ji-tian-liaono-dongki

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（20）

原胤昭（たねあき）と原女学校

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

B6番女学校は新栄女学校へ受け継がれたが、カロザース夫人のA6番女学校はどうなったのか。本連載（18）で、A6番女学校の生徒は原女学校に移されたとして終わったので、原女学校の設立を書かねばならない。

原女学校は原胤昭が設立したもので、日本人が最初につくったキリスト教の女学校である。学校設立の経緯は後に述べることにして、まず原胤昭の数奇な運命と免囚保護の活動を述べておこう。

原家は代々町奉行与力であったので胤昭は14歳で与力になった。与力というのは南北両町奉行にそれぞれ25人つく武士で、与力の下に同心（足軽級）が130人ずつ、さらにその下に目明し、岡っ引きが相当数ついて江戸の治安を守るのである。禄高は200石だが、羽振りがよい。大名屋敷の法律顧問のような仕事もするし、芝居小屋、遊女屋、祭礼等、人の集まる所で睨みをきかすから、つけ届けが多く豪勢な暮らしをしていた。しかし楽なことばかりではない。牢屋で死人が出れば検死役として紫黒色にはれ上がった死体を検（あらた）めなければならないし、罪人の死刑の時には小塚っ原に出かけて非人が罪人の脇腹に突きさす槍に流れる血を見届けねばならない。14、15歳の与力・原胤昭にとって、これは残酷な経験であった。

幕府崩壊後、一時、東京府の職員になったが辞職して、カロザースのたてた築地大学校に入り、聖書を聴いた。やがて入信。その時の状況を原は次のように語る。入信の意志を告げた時、宣教師が、政府が君を縛っても死刑にしても信仰を貫くか、と尋ねた。原はキリスト教の信仰は日本のため、社会のためであるから決死の覚悟だと答えた（原胤昭「私と基督教」『新時代』大正14年10月号）。

丁度、キリスト教禁教の高札がはずされた明治6年末の頃である。禁教の高札がはずされても、世間のキリスト教への眼は疑惑に満ちていたし、警官は信者の跡をつけていたと言う。原の若き日、与力として見た世間の裏表。市民取締、犯罪者に対する人権無視。そして維新混乱期における幕府の無秩序を目の当たりにみた原が考えた末が、キリスト教入信だったのである。

晩年の原胤昭

与力の家で蓄(たくわ)えがあったのか、彼は銀座に出版社を構え、和漢文の聖書を売りまくった。また神田須田町に錦絵店を開いてキワ物出版もした。明治16年、前年に起った福島事件の首謀者・河野広中以下6名が獄につながれると原はこれを「天福六家族」と題した錦絵にして売り出した。「天福」は「転覆」をもじったもので自由民権の立場にたって、政府を批判したものである。原は捕えられ、出版条例違反で禁錮3ヶ月となり、石川島監獄にほうり込まれた。

監獄で見たものは、自分が与力時代に見た旧幕時代の囚人と変わらない人権蹂躙の最たるものであった。出獄後、彼はキリスト信者として監獄改良と出獄後の更生保護事業に生涯をかけた(小丸俊雄「免囚保護の原胤昭」『千代田区の物語』のうち)。

原が女学校をたてたのは彼が監獄に入れられる7年前の明治9年5月のことである。原が5,000円の大金を投じ、銀座3丁目に煉瓦造二階建の校舎をつくった。設立趣意書には欧米では子女の教育は教養ある母親に責任があるから人材が育つ。ゆえに日本でも教養ある婦人を教育する女学校をつくらねばならぬという趣旨がしたためられている。学科は英語、算術、和漢文、裁縫で、英語の教師はニューヨークの米国長老教会婦人伝道局に頼んでミセス・ツルーM・T・Trueを派遣して貰った。和漢文を教える日本人教師の給料は生徒が支払う謝金(授業料)でまかなうと趣意書に書いてある。授業料は月一円であった。

9年12月25日のクリスマスに開校式をあげた。午後5時の開会で校舎の外側一面に提灯(ちょうちん)をつけ、内部も灯(あかり)一ぱいで、飾り物が輝き、これを見ようと見物人が押しかけた。会場は横浜や築地からきた西洋人や学校、教会関係の日本人で充満し、その中で女生徒の文章暗唱や音楽演奏が行われ、聴く人々は手を打ち足を踏んで感心したと言う。

原胤昭が原女学校をたてた最初の動機は、カロザース夫人が広島に行ってしまうので、夫人の家塾・A6番女学校の生徒が取り残されて可愛そうだという単純誠実なものであった。ゆえにA6番女学校の生徒を引き継いだが、新しい女学校を設置するに当って、原は新しい女性、これまでの日本女性にない知徳の備わった女性像を画くようになった。それは前にあげた設立趣意書にくわしく書かれている。それについては割愛するが、原女学校は、これまでの米国のキリスト教ミッションによる学校ではなくクリスチャン原胤昭個人によるキリスト教主義の学校として誕生したのである。

原女学校は校主・原胤昭のキリスト教社会事業の根拠地として各種会合に使われた。生徒によるオルガン演奏や讃美歌合唱も東京のキリスト教界の華として喝采されたが、原胤昭の他の社会的事業が多くなって学校経営が行きづまり、明治11年7月、休業後、そのまま閉校になった。生徒はB6番女学校の後身・新栄女学校に移された。

参考文献『女子学院の歴史』

大泉学園都市、小平学園都市、国立学園都市
―学園都市建設への飽くなき夢―

谷本(たにもと)　宗生(むねお)(大東文化大学)

先のニューズレター19号で紹介した文献『国立に誕生した大学町―箱根土地(株)中島陟資料集』(2015年8月)をよく読んでみると、なかなか興味深いことが分かる。重複ながら大事な点ゆえ、中島陟(のぼる)(1889～1958年)という人物は、箱根土地(株)を設立した堤康次郎(西武グループ創業者)の妻である文の妹婿で、箱根土地(株)の常務取締役をつとめ、国立@大学町開発の実務上の責任者であったとされる人物である。同上書の第6章「大泉学園都市と小平学園都市」は、なかでも教育史・大学史上たいへん注目される。箱根土地(株)は、大正後期に東京郊外の土地を次々に買収して、大泉、小平、そして国立と新たな学園都市建設を試みたのである。国立学園都市だけがなぜか現在においても周知されているが、大泉・小平・国立と学園都市建設への飽くなき夢といえようか。

大正13年11月から、練馬の大泉学園都市(50万坪)が分譲開始される。大正15年ころの分譲販売チラシには、「大泉学園都市は本社郊外大土地経営の第一着手として本社の永く紀念すべき土地であります。」と宣言されている。結果的には、大泉には残念ながら大学誘致は果たされなかったが、学園都市として必要な環境基盤の整備は進んだといえよう。「新設東大泉駅前から坦々たる直線の大道路が碁盤目のように整然と開かれ、すべて新しい郊外住宅が各所に点在して居ます。…お子供(ママ)さん達がブランコや遊動木に嬉戯する間を緑陰のベンチで静かに新刊書を繙くもよいことであります。静かにリズミカルな[赤]松籟を聴きつつオゾンに富む涼冷の風を満喫しつつ、暑さ知らずの大泉公園に楽しい一日を送り晩涼を追ふて御帰宅になれば、最も適切な鎖夏法であると思ひます。…大泉学園都市の如き工事の完成した大地積の経営に於て始めて徹底的の建設が実現せらるるのであります。」(同上チラシ)。

大正14年3月から、小平村の小平学園都市（60万坪）が分譲開始される。前年13年8月に、明治大学と移転（7万坪）契約を結び、分譲区画を設計して分譲開始したのである。ところが翌年、明治大学から契約取消しの申し出があり、大正15年7月契約が破棄されることになる。幸いその区画には、東京商科大学の予科が移転することで決着する。昭和2年ころに作成された「小平学園分譲区画図」には、「小平学園は数万坪の敷地に移転新築せらるる壮麗なる商科大学予科を中心として周囲に明るい住宅地商店地を区画し、国分寺駅より主要道路を設け、格子縞の如き三間道路を縦横に開き、小学校、運動場、娯楽場、日用品マーケット等を秩序整然と施設致します。…愛と平和と健康とに充ちた新生活こそ人生最大の幸福であります。住宅地の良否が健康に及ぼす影響の大なることは申す迄もありません。如何程自分の住居が良くとも周囲の環境が添はなければ理想のものとは申されません。此処は学校を中心とする品位ある教育町ですから風教を害ふ音曲もなければ脂粉の香りもありません。」と記されている。

大正15年1月から、国立の大学町・学園都市（100万坪）は一般向けの分譲が開始される。関東大震災の甚大な被災を受け、大正12年9月東京商科大学は箱根土地に移転先探しの打診を行ったという。そこで箱根土地の堤康次郎は、同年12月～大正14年4月まで重役の中島陟を大学都市と観光都市の調査研究のため欧米各都市視察に派遣する。中島は東京物理学校や東京外国語学校などで学問技術を学んでいて、英語やドイツ語にも通じている。ドイツのゲッチンゲンをはじめ、欧米各都市の主要施設や住宅、交通網を視察し、測量調査や計画都市の資料収集を旺盛的に実施したとされる。大正14年秋に分譲案内として発行された「国立の大学町鳥瞰図」には、「…本社はこれより積年の研究と経験とをここに傾倒して近代文化に即したる理想的の大学町を建設致します。…今やこの地が自然と人工の双美を俟つて大学を中心としたる理想的田園都市として我国最初の計画たる歴史的建設をなしつつあります。若しそれ逝けるトーマス、モーアをしてこの地に在らしめば之を生きたる題材として彼れの麗筆『理想郷』は更らに一段の光彩を放ちしことを信じて疑ひません。」と記されている。驚。

近代日本における大学予備教育の研究⑳
―早稲田大学附属高等学院の特修科②―

山本（やまもと）　剛（たけし）(早稲田大学大学史資料センター)

はじめに

前号より早稲田大学附属高等学院(以下、高等学院)に、1941(昭和16)年に新たな学科目として設置された特修科について考察してきた。本号でも、引き続き特修科の内容を検討しよう。

1　特修科の内容

文部省に提出された学則改正の申請書によると特修科の内容として、5項目が記載されている[1]。以下、その項目を摘記する。すなわち、特修科は、①従来の高等学院に設置されていた「学友会」を解散して設置され、「学生生徒」の「自治自発ノ精神ヲ涵養セシメ自発的研究並労作ヲ以テソノ特色ト為」すこと。そのために生徒は、特修科の「科目」を「各自ノ天分、個性ニ基」づいて、「選択」すること(第一項)。特修科の科目の設定としては、②「同学院ノ教育上ノ見地」より「正科ニ対シ充分ナル関連」を保ちながら、「学生生徒ヲシテ充分ナル自発的研究並ニソノ個性発揚ニカメ」ることができるように配慮する。そして、特修科は、「一週四時間ハ之ヲ選択必修」として、そのうち「二時間ハ必ズ語学ヲ履修セシメ、他ハ随意選択トシ強制ト自由トヲ適当ニ配合」することで、「各自ノ自律性ヲ伸長シ自学自修ノ習性ヲ助成」することを期する。加えて、「幹事制ヲ採用シ教員指導ノ下ニ学生生徒ヲシテ教室、研究室、道場等ノ管理及各種行事並諸計画ニ当ラシム」(第二項)。また、③特修科のなかで「学芸」に関する科目は「優秀ニシテ指導性アル教員ヲシテ之ヲ擔任」させて、「一組ノ人員ヲ三十名以内ニ制限」し「学生生徒ニ対スル接触ヲ密ナラシメ以テ薫育上ノ効果ヲ高」めるとともに、「其教授ニ際シテハ午前中ノ

一般必修科ニ比シ特ニ各自ノ天分発揚ニ努メシム」(第三項)。続いて、④「体育」に関する科目は「特ニ指導ヲ厳ニシ技術ノ練磨ト精神ノ鍛練ニ依リテ優秀ナル人格ノ錬成ヲ行ハシメントス、尚之ニ充ツル時間ハ午後ニ限リ以テ学業ト体育トヲ両立セシメ従来ノ弊風ヲ一掃シ得ベシ」とされた。さらに、「体育」に関する科目は「凡テ本大学ニ特設セラレタル学徒練成部ノ統轄指導下ニ置」く(第四項)。最後に⑤特修科に関しては「成績ヲ考査シ学年試験成績判定ノ資料ニ共ス」(第五項)と、記載されている。

おおむね上記の要点として、特修科は、①従来の生徒組織である学友会を改組し新設されたこと、②各生徒の自発的研究を重視し、週4時間を選択必修科目として編成し、そのうち2時間は語学を履修すること、さらには③学芸に関する科目は指導力のある教員を担任させて少人数のクラス単位で行うこと、一方の④体育に関する科目は学徒練成部の統轄指導下に置くこと、⑤特修科の成績は学年試験の判定の資料とすることなどが確認できる。

再三述べるように、特修科が学友会を改組し新設されたのならば、そもそもそれは1940(昭和15)年から翌41年にかけて、各学校の校友会、学友会等の自治的生徒組織を報国隊、報告団、護国会等に改組改称することを余儀なくされた戦時体制下の臨時措置として捉えられるが[2]、後に検討するように高等学院の特修科では上記のように語学と学芸に関する科目を重視していたことは注目すべきである。

さらに、同申請書には、特修科の科目が記載されている。「科学、語学、芸術、国防、武道、競技等」の諸科目が設置予定であったことはすでにふれた。諸科目は班単位として設定され、その中で各教授内容が設定されている。それは次のようである。

特修科設置予定の科目

一、学芸ニ関スルモノ

語学班　英、独、仏、支那、伊太利ノ各外国語研究、国文、漢文研究

科学班　哲学研究、政治経済研究、史学研究、自然科学研究、社会学研究等

芸術班　文学、美術、劇及音楽研究

二、体育ニ関スルモノ

国防班　射撃、馬術、銃剣術、自動車、滑空、航空機械化ノ諸部

武道班　剣道、柔道、弓道、空手ノ諸部

運動競技　体操、競走、水泳、蹴球、ラグビー、野球、庭球、ホッケー、端艇、送球等ノ諸部

このように①学芸に関するものとして、「語学、科学、芸術」、②体育に関するものとして「国防、武道、運動競技」が設置予定の科目であった。この諸科目の詳細な内容に関しては、後に検討することにして、続けて認可申請書の内容を検討する。

同申請書には、さらに「特修科実施ニ関スル要綱」として、①「特修科要項」、②「特修科実施上ノ細目」、③「昭和十六年度特修科表」、④「特修科時間割(大綱)」が記載されている[3]。このうち本稿では、すでに上記で明らかになった内容と重複する部分もあるが、①「特修科要項」を検討する。

2　特修科要項

「特修科要項」は次の8項目が記載されている。以下、その項目ごとに摘記する。すなわち、特修科は、①「選択必修トシテ全テ之ヲ午後」に配置する(第一項)。②「一般必修学科ノ画一的公式的ナリト異リ、其教材、課題変化ニ富ミ、時ニ時代及時局ニ即応シテ之ヲ選定採用」する(第二項)。③「学年、組ヲ単位トスル平等主義ヲ排シ、特ニ学生ノ個性ヲ重視シ、課題ヲ基本トセル指導ニ依リテ天才ノ発揮伸長ニ機会」を与える。ただし、その「各種専門的研究ハ学部、大学院ニ於ケル専攻トハ異リ、ソレノ基礎訓練ニ重キヲ置ク」もの

とする(第三項)。④「自学自習ヲ原則トシ、観念的学習ヲ排シテ能フ限リ生キタル資料ニツイテ実習、労作セシメ、以テ学生ノ自発的能動的攻学態度」の育成を助長する(第四項)。⑤「教授ハ選ビタル課題ニツキ常ニ学生ト共ニ攻学研究スルノ立場ニ立チテ指導」し、「以テ教授自カラノ攻学心ヲ満足セシムル機会ヲ得ルト共ニ、学生ト教授トノ人格的接触ヲ一層密ニシ教学一体ノ実ヲ挙クルコトヲ主眼」とする(第五項)。⑥教員は「学生」が「特修科ノ何レカノ班ヲ選択セシムルニ当タリテハヨク之ヲ指導シ」、学生は、「且ツ一旦選択シタル上ハ任意ニ変更セシメズ、責任ヲ重ンジ目的貫徹ニ邁進セシム」(第六項)。⑦体育に関する特修科は「学徒練成部ノ指導監督下ニ置キ、人格優秀適材有能ナル指導者ニ担当セシメ、体力錬磨ニ則シテ特ニ人格錬成ニ重キヲ置」く(第七項)。⑧毎学期に「其成績ヲ調査報告」することにする。ただし「其成績ハ一般必修科目ノソレト区別シ、直接総点数ニ加算セズ、学歴ニ登録シテ参考材料」とする(第八項)。

以上が特修科の内容であった。この内容のいくつかはすでに挙げたものもあるが、おおむねその要点として、①選択必修科目として午後の時間に行い、②正課の学科目とは異なる教材、課題を採用し、③平等主義を廃して、生徒の「天才ノ発揮伸長」の機会を与え、④「自発的能動的攻学態度」を育成することを挙げている。さらに、⑤特修科を担当する教員の心得や⑥科目選択の履修上の注意点、⑦体育は学徒錬成部の指導監督下に置くこと、または⑧成績判定等の様相も把握できる。

それでは、特修科はどのような教授内容であったのだろうか。特修科設置は、戦時体制下の臨時措置のもとにおかれていたことは再三述べた。この要綱の内容が「高等学校ニ関スル要綱」を受けたこともすでに指摘した。ここで教学刷新の動きを受けた高等教育改革の政策史を詳細に述べる余裕はない。高等学校と大学予科が戦時体制下の教育改革を最も強く受けた高等教育部門であったことを指摘しておけば足りるであろう[4]。

言うまでもなく1941(昭和16)年以後、高等教育政策ならびに高等教育の

実態は、急速に臨戦体制下の破滅的な様相を呈してくる[5]。問題はこうした戦時体制のもとで教育改革を余儀なくされた大学が「学力」の維持に対してどのような対応を行ったのかという点にある。

次号では、こうした状況のもとで、特修科の教授内容はどのようなものであったのかを検討しよう。

---

[1]「特修科内容」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。

[2]『日本近代教育百年史』第5巻(1974年、国立教育研究所)、寺崎昌男執筆部分、1221頁。

[3]「特修科実施ニ関スル要綱」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。

[4] 寺崎昌男編『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践－』(1987年、東京大学出版会)、174頁。

[5] 前掲書『日本近代教育百年史』第5巻、寺崎昌男執筆部分、1210頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（20）

学校沿革史にみる補習科・専攻科（16）：島根県（8）・鳥取県（3）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（東京電機大学）

島根県高等学校長協会の沿革史である『島根県公立高等学校長協会五十年誌』（1998年）には、専攻科にするか、補習科にするかという問題について、時の教育長の意向が影響したという回想がある旨、第17号で記した。資料の未複写により詳細に触れられなかったのだが、資料を入手したので、補遺として該当箇所（座談会の一部）を以下に掲載する。

〔兼折博〕今の四一年ということで初めて思い出したんだけども、最初は専攻科ということで、随分専攻科にできないかということでもめたはずなんですよ。だけど結局無理だということで、補習科。で補習科となると、県費にならんということなんですよ。それでPTA立ということになったんだ。ここらあたりが皆、脇田教育行政なんだな。補習科、それから高校入試改善で五教科にし内申重視にする、それから学区を大学区にしたのも。だからあの人の教育にかける情熱は、結果は別にしても情熱はかなり激しいものがありました。

〔飯塚一雄〕これは校長会として働きかけましたよ。それで学事課に随分渋られた。

〔長廻邦一〕香川県にも視察に行きましたが、高松一高は大変効果を挙げていました。

〔今岡〕鳥取県は、県立の専攻科の形でやりましたね。

〔飯塚〕補習科を法規にないといって学事課が反対したから、それじゃあ県立じゃなくていいから、PTA立でやろうということになった。そしたら校舎を使うとは何ごとだと県会で問題になった、ただで使わせるとは何ごとだと。それから教員の勤務時間、教員は職業に専念するべきだと。この問

題は教育授業だからいいじゃないかというようなことで県議会では了解したけども、校舎を貸すということについてはどうしてもいけないということで、今はどこも家賃を払っておるでししょう。
〔今岡〕なんぼか払っていましたね。
〔事務局〕殆どがやがて財団法人の記念館等を建てまして、それを使っています。県の建物を使っていない形になりました。
〔長廻〕それで教員の配置も本当は全日制と補習科の教員なんかもある程度交流して、交流という時間も余分に見てくれというような要求をして、了解を得たように思った。だからちょっと余分に一名分位増やしてもらったように思う。
〔事務局〕今は無いですね。教員もやっておりますけどもいわゆる職務専念義務免除願いを出しております。
〔兼折〕補習科というのは生徒にも父兄にも大変なメリットですよ。というのは、人件費が殆どいらんでしょう。そうして、今までの三年間の流れの中でそこで先生に教えてもらう。それから金はうーんと安いということ、それは予備校に関係してみてそれを痛感するのです。予備校がどれだけ安くしようと思っても、今の補習科の二倍以上はもらわないと、とにかく人件費が払えない、ということがあってね。だからああいう格好で卒業後一年か二年、面倒みてもらえるということは、それは本当に生徒も父兄も三拝九拝、ありがたいと思わなけ(ママ)きゃ、それはもう。
〔長廻〕そうですね、それに実際効果が上がるわけだから。
〔今岡〕島根県の高校教育も以前は要するに現役で入れることばかり中心に考えていた。それでやはり型が小さくなった。それが補習科を作ることによって、もう一年位やってもいいという気になった。そういうことは実際私も効果があったと思います。島根県の進学率も上がっていると思います。(以下略)(pp.240-241)

専攻科ではなく補習科にしたために、教員待遇や校舎使用に多大な影響

があったことが分かる。また、廉価な授業料がもたらすメリットにも触れられている。校長会の対談なので、教員の献身についてはある程度割り引いて考える必要はあるが、決してなかったとは言えないだろう。

今号からは、鳥取県の専攻科の実態を検討する。今号の対象は、授業料と入学志願状況である。

補習科とは異なり、専攻科は高等学校内の正規の組織であるために、学校沿革史に残る情報の種類も豊富である。授業料もその一つである。

表1は鳥取県の専攻科の授業料を示している。

表1　鳥取県立高等学校専攻科の授業料

年度	授業料(年)	学習費(年)	【参考】本科授業料(年)
1959(昭和34)	10,000	(不明)	7,800
1960(昭和35)	10,000	3,100	7,800
1961(昭和36)	10,000	5,200	7,800
1962(昭和37)	13,000	5,700	9,600
1963(昭和38)	13,000	5,700	9,600
1964(昭和39)	13,000	5,700	9,600
1965(昭和40)	13,000	7,000	9,600
1966(昭和41)	13,000	8,000	9,600
1967(昭和42)	13,000	8,000	9,600
1968(昭和43)	13,000	8,000	9,600
1969(昭和44)	13,000	10,000	9,600
1970(昭和45)	13,000	10,000	9,600
1971(昭和46)	13,000	10,000	9,600
1972(昭和47)	18,000	12,000	9,600
1973(昭和48)	18,000	12,000	14,400
1974(昭和49)	18,000	17,000	14,400
1975(昭和50)	18,000	17,000	14,400
1976(昭和51)	48,000	17,000	38,400
1977(昭和52)	48,000	17,000	38,400

1978(昭和53)	48,000	17,000	38,400
1979(昭和54)	72,000	17,000	57,600
1980(昭和55)	84,000	18,000	
1981(昭和56)	84,000	20,000	
1982(昭和57)	84,000	20,000	
1983(昭和58)	93,000	20,000	
1984(昭和59)	93,000	20,000	
1985(昭和60)	93,000	20,000	
1986(昭和61)	103,200	20,000	
1987(昭和62)	103,200	20,000	
1988(昭和63)	103,200	20,000	
1989(平成1)	133,200	20,000	

(専攻科分)浜田英一「鳥取県立高等学校専攻科30年の歩み」『研究紀要』第26号(1990),p.61より作成
(本科分)鳥取県立米子東高等学校編『創立八十周年記念誌』(鳥取県立米子東高等学校,1979),p.750より作成
授業料、学習費とも前・後期に分けて徴収。
校外模試代は別に徴収。
学習費の主な用途は、図書費、厚生費、学習指導費等。
本科授業料は月額を12倍したもの

本科に比べると、授業料は1.3倍程度である。わざわざ作った専攻科であるから、それ相応の負担をということになるのだろうか。

しかし、一般の予備校に比べればかなり廉価である。多額の税金が投入されている公立学校ゆえに可能な授業料設定である。また、教員の増配は行われてはいるものの、通常の授業として専攻科の授業を担当すればよいので、特段の人件費もかからない。正規の学校内の組織であることのメリットを生かした設定である。

では、このように廉価での受験準備が可能である専攻科には、どのくらいの生徒が志願したのだろうか。表2は、鳥取東高等学校の専攻科の志願者数の推移である。

表2　鳥取東高等学校専攻科の入学志願者

年度	志願者数	年度	志願者数
1974(昭和49)	210	1982(昭和57)	151
1975(昭和50)	209	1983(昭和58)	149
1976(昭和51)	250	1984(昭和59)	126
1977(昭和52)	217	1985(昭和60)	135
1978(昭和53)	154	1986(昭和61)	169
1979(昭和54)	119	1987(昭和62)	151
1980(昭和55)	111	1988(昭和63)	142
1981(昭和56)	126	1989(平成1)	148

浜田英一「鳥取県立高等学校専攻科30年の歩み」
『研究紀要』第26号(1990),p.55より作成

表中の時期の鳥取東高等学校の専攻科の定員は、100名である。定員をはるかに上回る生徒が、専攻科を志願していたということである。しかし、1978年以降は志願者数がそれまでより少なくなっている。この時期の落ち込みは、共通一次試験の導入と軌を一にしていることから、都市部の予備校への流出という原因が想像されるが、推測の域は出ない。

では、他校も含めて専攻科はどのくらいの生徒を抱えていたのであろうか。次号では、生徒の動向を検討する。

大阪市の女子教育⑪
―西区女子手芸学校の教育方針―

徳山（とくやま）　倫子（りんこ）（京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC）

前号では、西区女子手芸学校を組織変更して大阪市家政女学校を設置する計画が1910（明治43）年に頓挫し、同校は西区女子手芸学校のまま存続することになったと述べた。今回は、『西区第一高等小学校西区女子手芸学校一覧』（1912年・推定）の26-34頁において、「現在の手芸学校」の「方針」として綴られた同校校長による文章を引用しながら、家政女学校設置計画頓挫後の同校の教育方針について考察する。

まずは、「本校の性質主義目的」と題された文章から引用しよう。

> 現今孰れの女学校も皆賢妻良母養成を目的とす、これ固より然るべきなり、されど其所謂賢妻良母なるものに非常の相違を来すべし、故に宗教的の学校若くは西洋諸国の特質を帯ぶるものと、我邦古来の思想に固着せるものとは教育の成績に於て、各性質を発揮して従て幾多の美点を挙ぐると共に、又幾多の欠陥をも暴露するに至れり、余はこれ等の点に鑑み誠実にして貞淑、以て家庭に社会に国家に適応すべき円満なる婦女子を養成せんことを期す

同校の校長は、「孰れの女学校」においても「賢妻良母」（同文では良妻賢母とは表記されていない）の養成が目的とされているが、学校により「教育の成績」に差があると述べたうえで、同校は「家庭に社会に国家に適応すべき円満なる婦女子」の養成を目的とすると位置づけていることが判る。では、どのような方法でこのような「婦女子」を養成しようとしていたのだろうか。「本校の組織と特色」と題された文章から検討する。

（教員の：筆者補足）選任に際しては左の標準を立てゝ百方人選に従事せり。

一、 年齢相当にして、多少世の辛酸を知悉せる人。

二、 温良貞淑にして、常識の円満なる人。

三、 裁縫技術に堪能にして、教授に熱心なる人。

こゝに一言すべきものあり。普通の学校に在りては、裁縫教師は専科教員にして学級に対しては客位たり、されど本校に於ては裁縫教師は最も多く生徒に直接するを以て、勢ひ普通学校の所謂学級担任教員たらざるべからず、これ本校の教員選任上裁縫教師の選定に向ひ特に重きを置く所以なり。

同文からは、同校の生徒の教育はおもに裁縫教師が担うことを期待されていたことが判る。この裁縫教師に何が期待されたのかは、以下の文章から明らかになる。

余曾て英国の貴女教育に精通する人士に聞く、妙齢の貴女の多くは箇人教師に就きて、社交並びに家政を修め、併せて人格を修養す、而してこれ等の箇人教師は、最も常識に富み、且品位高き者にして、十数名乃至三十名の生徒を自己の家庭に集め、各人適切の教育を為すと、余聞て健羨に堪へず、顧みて我邦亦『お針屋』なるものあり、形略これに似たり、されど、この師匠なるもの多くは、技術一方の人にして顰■すべきこと多しと雖ども、亦た幾分参考すべきもの無しとせんとや、（中略）学級の担任たる裁縫教師は、自己の人格を以て生徒の人格を造ることに心掛け、周到なる監督と懇切なる指導をなし、入学、退学、欠席、通学随意科目の選定、各科目の成績、飲食、健康交友、慰安、座作応対のことに至るまで不断の注意を加へ、常に能く家庭と

接近して、生徒の境遇及傾向を知悉し、生徒をして第二の母を得たるの感あらしめよ、又これが学級の生徒たるもの、互に婦言、婦容、婦徳、婦功に注意し、師を尊ぶこと厳乳の如くなれ、師に親むこと慈母の如くなれ、かくて其学級生徒は、女書生又は生徒らしき生徒とならずして娘らしき学級生徒となり、学級は学校らしき役所らしき学校とならずして、始めて家庭らしき学校となり、学級連合の当校は、始めてこゝに一大家族的学校となるに至らん、（中略）一大家族らしき学校は、庶は■々として期するところの賢妻良母を輩出することを得んか。

同校の校長は、英国の「貴女」の教育を理想としながら、日本における「お針屋」の技術教育偏重を批判しつつも、それにも参考にすべき点があると述べている。同校の裁縫教師は、「自己の人格を以て生徒の人格を造ることに心掛け、周到なる監督と懇切なる指導」を行い、生徒の「入学、退学、欠席、通学随意科目の選定、各科目の成績、飲食、健康交友、慰安、座作応対のことに至るまで不断の注意を加へ」ることが期待された。教師を親のような存在と感じる、「娘らしき」生徒を収容する学級が集合した「一大家族」のような学校では、同校が「期する」ような「賢妻良母」の養成が達成できると考えられていた。

では、このような同校の方針に、大阪市立家政女学校設置計画の頓挫は何かしらの影響を与えたのだろうか。計画頓挫後の同校は、「補習教育としての手芸学校」であると記されている。大阪市立家政女学校に組織変更された際には、尋常小学校卒業生を入学させる計画であったが、それが叶わず同校は高等小学校卒業生が入学する学校のままであった。このことについては、以下のように記されている。

さきに手芸学校改造の議あるや、家政女学校案立ちて、而して行はれず、頗る遺憾を感ずるも、幸にして手芸学校は高等小学校卒業生を収

容することゝなるを以て、高等小学校より手芸学校を見れば、即ち高等小学校の補習教育所なり、此補習教育所たる奥座敷と適当の連絡を得れば、高等小学校は始めて、一貫せる女子教育の系統を得ることゝなり、学科本位とせる高等女学校と相併馳して、庶幾くは堅実なる女子教育を完成することを得ん

高等小学校卒業生を対象とした同校は、高等小学校卒業生の「補習教育所」(＝「奥座敷」)として位置づけられた。尋常小学校と直接接続する高等女学校と並んで、「高等小学校+女子手芸学校」というコースが「女子教育を完成」させることができるものであると主張された。自校の誇りや存在意義を示すために必死になっている校長の姿が目に浮かんでこないだろうか。

東京帝国大学実科の教育内容
―学科課程の変遷②―

松嶋（まつしま）　哲哉（てつや）（日本大学　研究員）

前号に続き、本号でも東京帝国大学農科大学（学部）実科の教育内容を明らかにするために、学科課程を明らかにしていきたい[1]。

2.　1913年の学科課程改正

1900年度に整えられた実科の学科課程は1913年度に改正される。本号では、1913年度に改正された学科課程を示し、学科課程の内容と特徴を明らかにしていきたい[1]。なお、前号でも述べたが1913年度の学科課程改正について沿革史では触れられていない。そのためか、学科課程が改正された理由は明らかでない。

農学実科学科課程表（1913年度改正）

学年	科目	第1期	第2期	第3期	合計
第1年	物理学及気象学	3	3	1	7
	化学	2	2	2	6
	植物学	2	2	2	6
	動物学	2	2	−	4
	地質学	2	−	−	2
	害虫	2	2	−	4
	土壌学	−	2	2	4
	肥料学	−	2	2	4
	作物	−	−	2	2
	農業工学	−	2	2	4
	英語	5	5	5	15
	農場実習				

合計		18	22	18	58
第2年	化学	2	2	2	6
	農業工学	2	−	−	2
	作物	3	3	3	9
	植物病理学	2	2	−	4
	園芸学	2	2	2	6
	養蚕学	−	3	−	3
	畜産学	2	2	2	6
	家畜飼養論	2	2	−	4
	経済学	2	2	2	6
	法律大意及農業法	2	2	2	6
	英語	2	2	2	6
	植物学実験	−	−	1回	
	動物学実験	−	1回	−	
	農場実習				
合計		21	22	15	58
第3年	作物	3	2	−	5
	園芸学	2	2	−	4
	畜産学	2	2	−	4
	農産製造学	3	3	−	6
	農業経済	2	2	2	6
	農政学	3	3	3	9
	獣医学大意		2	3	5
	林学大意		2	3	5
	化学実験		3回		
	農学実験	1回	1回	1回	
	農場実習				

	農学演習	–			
合計		15	19	12	46

※農場実習は、1908年度の『東京帝国大学一覧』以降空欄となっている。

1913年度改正の要点は、以下の3点にまとめることができる。①科目の整備――「農業工学」と「法律大意及農業法」の新設、「土地改良論」の廃止、「土壌学」と「肥料学」を1年次科目へ変更。②2年以上において、「植物学実験」、「動物学実験」、「化学実験」、「農学実験」といった実験科目の新設。③3年における「農学演習」の設置である。

その他、時間数の増減もなされている。殊に英語の時間数が増加（毎週2時間→毎週5時間）されていることは特徴的である。前号で明らかにしたが、実科の学科課程の特徴として、英語の時間数が少ないことが指摘できた。そのためか、13年改正によって、英語の時間数が増加する。これにより、農学実科（東北帝大農科大学）と同時間数程度となったが、盛岡高等農林学校の英語時間数と比較すると依然として少ない。

さらに、実科の学科課程の特徴を明らかにするために他校の学科課程と比較したい。ここで比較対象とするのは、盛岡高等農林学校[2]、鹿児島高等農林学校[3]、農学実科（東北帝大農科大学――後の北海道帝国大）[4]である。

比較の視点としては以下の3点を設定した。第一に、実科に新たに設置された実験科目と演習科目が他校ではどのように位置づいていたのか。第二に、実科と各学校の設置学科目の比較。第三に、授業時間数の比較である。

はじめの視点を比較すると、実科の学科課程の特徴が演習科目を設置したことにあることが明らかになる。比較対象の3校とも実験科目は設置されている[5]。だが、演習科目を設置していたのは実科だけであった[6]。

第二に、設置学科目に注目すると、各学校で少しずつ異なっていることが明らかになる。ここでは、各学校の教育課程は割愛するが、以下の2点を指摘したい。第一に、実科は修身と体操が課されていなかったこと、第二に専門学校では教育学の科目が設けられていたことである。殊に後者は、教員養

成機能との関わりで重要な論点なのかもしれないが、今後の課題としたい。

最後に、授業時間数を比較すると、実科の毎週学科時間数が少ないことが明らかになる[7]。各学校における毎週学科時間数の総計を表にまとめたものが表1である。実科は、官立の両高等農林学校と比較して約20時間、農学実科（東北帝大農科大学）と比較しても約10時間以上時間数が少ないことが明らかとなる。

表 1

（単位：時間）	1 年	2 年	3 年
実科（東帝大）	58	58	46
盛岡高等農林学校	76	80	71
鹿児島高等農林学校	78	81	78
農学実科（東北帝大）	69	69	67

注：選択科目、実習、実験の時間は除く

また、表1からは帝大に附置されていた専門部の総時間数が高等農林学校に比して少ないことが明らかになる。官立の両高等農林学校では、総時間数に大きな違いが見られないのにたいして、農学実科（東北帝大農科大学）と両高等農林学校を比べると、約10時間程度の差がみられる。

以上、1913年度に改正された実科の学科課程を検討してきた。本号の最後に、13年度改正の特徴をまとめたい。

13年度改正の大きな変更点は、実験科目と演習科目の設置であった。なかでも、演習科目が設置されたことは実科の特徴である。他校では演習科目が設置されていなかった。また、実科の学科時間数が他校に比べて少ないことも明らかになった[8]。

このような、実科の学科課程は1926年に再び改正される。この改正は実科の独立運動とも関わっていた。その内容については、次号としたい。

[1]『東京帝国大学一覧』従大正2年-至大正3年(国立国会図書館デジタルコレクション)。

[2]『盛岡高等農林学校一覧』従大正2年-至大正3年(国立国会図書館デジタルコレクション)。

[3]『鹿児島高等農林学校一覧』従大正2年-至大正3年(国立国会図書館デジタルコレクション)。

[4]『東北帝国大学農科大学一覧』従大正2年-至大正3年(国立国会図書館デジタルコレクション)。

[5] 学校によって、実験科目の位置づけ方は異なっている。盛岡高等農林学校は、「実験及実習」となっており、実習と一括して位置づけられている。鹿児島高等農林学校は、各学科目の中に実験の時間数を確保している。また、農学実科(東北帝大農科大学)は、実科と同様に「化学実験」のように「○○実験」の形をとっている。

[6] なお、本稿では分析の対象としていないが、1913年度の東北帝大農科大学林学実科は、演習科目が設置されている。

[7] なお、前号で触れられていなかったが、1900年度の学科課程においても毎週学科時間数が他校と比較して少ないということが指摘できる。

[8] そもそも、高等農林学校と専門部(実科と農学実科)の学科時間数を比較すると、専門部の時間数が少なくなっている。この点は、専門部の教育機能を明らかにする点で重要な論点なのかもしれないが、今後の課題としたい。

学生寮の時代⑪
―旧制中学の寄宿舎（寄宿舎にかかわる職員たち）―

金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大学職員）

■各校の実例

本連載⑧において、1908年発刊の広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舎研究』を取り上げた[1]。この研究書では、全国224校にのぼる中等教育機関（旧制中学、師範学校、実業学校など）の寄宿舎を研究対象にしており、寄宿舎のさまざまな側面に焦点を当てて分析している。また、今日の高校などとは異なり、近代日本においては多くの中等教育機関で寄宿舎が設置されていたことが分かった。

ただ『中等学校寄宿舎研究』は包括的な記述のため、各校寄宿舎の具体的な様態は見えてこなかった。そこで本連載では、個別の実例をもとに中等教育機関における寄宿舎について検討してみたい。今回は旧制中学の例として、1920年ごろの浦和中学（埼玉県）の寄宿舎を見ていくことにする[2]。また比較のため、同時期の埼玉県内における旧制中学寄宿舎（熊谷中学、粕壁中学）を随時取り上げる[3]。

なお、寄宿舎における生徒の様子を見る前に、本稿ではまず職員と寄宿舎のかかわりについて見ていくことにしよう。

■寄宿舎にかかわる職員組織

浦和中の「校務分掌規程」では、「本校々務ヲ処理センカ為メニ教務部、舎務部及事務部ヲ置ク」[4]とされ、寄宿舎を所掌する部署として舎務部が設置されていたことが分かる。「舎務部ハ舎監ヲ以テ組織シ首席舎監主任トシテ之ヲ統括ス」とされ、舎監は「寄宿舎ヲ取締リ舎生ノ訓育ノ責ニ任シ特ニ舎風ノ指導ニ勉ム」と定められている。

舎監の任務は21項目にわたり詳述され、大きく2つに類別されている。「学校長ニ意見ヲ具申シ若クハ其承認ヲ経テ之ヲ処理ス」ものとして、寄宿舎における「諸規程ノ制定及改廃」「経費予算」「役員ノ任免」「炊夫ノ任免」など、「便宜之ヲ処理シ重要ナルモノハ学校長ニ開申スベキモノ」として、「舎生ノ賞罰処分ニ参与スルコト」「舎生ノ学資金出納保管」「炊事ノ監督」などが挙げられている。

舎務部の置かれた浦和中に対し、名称は異なるが熊谷中では舎監部、粕壁中では寮務部が置かれている。舎監の任務については両校とも浦和中と大差ないが、「在舎生徒ノ操行ニ注意シ訓誨奨励ヲ加フル事」(熊谷中)[5]など、舎監の教育上の役割についての記述も見られる。

■舎監の勤務

次に、舎監について見てみよう。現職員一覧で舎監について確認すると、各校とも3人の舎監がおり、その人物としては【表】のとおりである。舎監専任というわけでなく、受持学科を持つ教諭との兼任だったようで、体操に限らず様々な科目の担当者(教諭)だったことがわかる。他の職員(舎監以外)に比べて就職(着任?)年月の古い職員もいるが、逆に就職年月の新しい職員もいる。

【表】各校の舎監一覧

	氏名	職名	受持学科	就職(着任?)年月	卒業学校
浦和中	横越庄作	教諭兼舎監	体操	明治45年2月	日本体育会体操学校
	大塚龍夫	〃	国語、漢文	大正7年12月	神宮皇学館
	蓮　吾野	〃	数学	大正8年12月	試験検定
熊谷中	小川常次郎	教諭兼舎監	数学	明治32年4月	記述なし
	有山泰吾	〃	国語、漢文	大正7年2月	広島高等師範学校
	森川綾助	助教諭心得兼舎監心得	体操	明治39年3月	記述なし
粕壁中	須藤卯一郎	教諭兼舎監	物理化学	明治44年8月	記述なし
	工藤卯吉	教諭心得兼舎監	地理習字	明治33年4月	〃
	平山忠次郎	〃	数学	明治35年4月	〃

※各校『一覧』より作成。なお、浦和中は大正9年4月、熊谷中は大正8年1月、粕壁中は大正6年10月現在のもの。

また、「舎監ハ輪番宿直ス」（浦和中）など、舎監には宿直勤務が課されていたことも特徴だ。教員全体の「当宿直規程」では「当直及宿直ハ職員輪番ヲ以テ勤務ス但教務主任、舎監及実際事務ニ従事セサル職員ヲ除ク」（浦和中）など[6]とされており、3校とも、一般教員とは異なる舎監専用の宿直体制が行われていたようである。

ちなみに校舎の配置図を見てみると、浦和中では寄宿舎棟に舎監室があり、本校舎には別に宿直室がある[7]。粕壁中でも寄宿舎棟に舎監室・舎監寝室があり、本校舎には別に職員宿直室が設置されている[8]。これらの点からは、宿直の際、舎監は寄宿舎に専属していたことが伺われる[9]。

■生徒に近い舎監

以上、簡単ではあるが寄宿舎にかかわる職員（舎監）について見た。職員の中に、舎務部などのような寄宿舎を所掌する組織があり、寄宿舎においてはそれらの職員が特に運営に関与していることが垣間見られた。また例えば熊谷中では、「学級主任ハ其学級生徒舎監ハ寄宿生ノ行動ニ付キ之ヲ観察シ必要ト認ムル場合ニハ直チニ之ヲ教訓シ且ツ詳細ニ監督簿ニ記入シ訓育ノ参考ニ資スルモノトス」、「教員ハ常ニ生徒ノ行動ヲ観察シ事情ニ依リ学級主任又ハ舎監ニ通告」するとも記述されており、舎監は学級主任と同様に生徒の「監督者」として、他の教員に比べて生徒に近い存在であったことも伺える[10]。

寄宿舎運営の中において、重要な位置を占めていた舎監[11]。次回以降は舎監の役割にも注意を払いつつ、寄宿舎における生徒の生活、運営形態などを見ていくことにしよう。

---

[1]拙稿「学生寮の時代⑧―中等教育の寄宿舎―」本誌第17号（2016年5月）で、広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舎研究』金港堂1908年を取り上げた。

[2]『埼玉県立浦和中学校一覧』1920年をもとに検討する。以下、『浦中一覧』。

[3]『埼玉県立熊谷中学校一覧 大正八年一月』1919年、『埼玉県立粕壁中学校一覧 大正七年三月』1918年。以下、『熊中一覧』『粕中一覧』。

[4]「浦和中学校処務細則」より「第二章 校務分掌規程」『浦中一覧』p88

[5]「熊谷中学校々則」より「第一章 職員服務細則」『熊中一覧』p33

[6]「浦和中学校処務細則」より「第三章 校務処理内規」『浦中一覧』p102

[7]「校舎平面図」『浦中一覧』。

[8]「校舎略図」『粕中一覧』。

[9]時期が異なるためあくまで参考であるが、1900年初頭、師範学校における舎監の多忙さ（一日職務に拘束される点など）は舎監不人気の一因だったとも指摘されている。今泉朝雄「森文政期師範学校寄宿舎とその変化」日本大学教育学会『教育學雑誌』第38号2003年p45-46。

[10]「熊谷中学校々則」より「第一章 職員服務細則」『熊中一覧』p42

[11]なお各校とも、舎監の日誌についての記述がある。舎監の日誌が現存すれば、寄宿舎運営を知る重要な史料になるだろう。

戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑧
女子英学塾の宗教教育①

ママトクロヴァ　ニルファル（早稲田大学）

本号では、女子英学塾における宗教教育の背景として、創立者津田梅子のキリスト教とのかかわりと彼女の教育思想にキリスト教がどのような影響を与えているか、考察する。

津田梅子がキリスト教に出会ったのは、最初のアメリカ留学時であった。津田が預けられたランマン家はどの宗派にもこだわらないキリスト教の信者であったため、彼女にとってキリスト教を知る良い機会となった。8歳になったときは、自発的に洗礼を受けたいと申し出、1873（明治6）年7月13日、フィラデルフィアの郊外にある教会で洗礼を受けた。その後、11年間の「クリスチャン・ライフ」を終えて帰国したが、もともと津田家は両親である津田仙と津田初子を含め、ほぼ全員が洗礼を受けていた「クリスチャン・ホーム」であった[1]。このように津田はキリスト教に出会い、キリスト教は津田の一生涯にわたって重要な役割を果たしたと考えられるが、吉川利一によると、津田は信仰の問題についてあまり語らなかった[2]。そこで、津田のキリスト教とのかかわりや彼女のキリスト教に対する見解を通して、女子英学塾で行われた宗教教育の背景を明らかにする。

まず、キリスト教とのかかわりを概観する。津田梅子の父、仙はキリスト教信者であり、日本におけるキリスト教の伝道に尽力した人物である。彼は自ら創設した学農社農学校の生徒のために毎日曜礼拝会を催していただけではなく、キリスト教係の学校であった海岸女学校、普連土女学校などに深く関与していた。津田は最初の留学から帰国した後、1883（明治16）年に海岸女学校で英語を教えた。その後、1884（明治17）年2月から下田歌子の桃夭女塾で教鞭を振っていた時期には、日本語の聖書を学校に持っていき、同

学校の教師に読んで説明したことがあった。同僚の教師たちには津田の話が理解できなかったことや、キリスト教に対する誤解を正そうとしたことなどが記録に残っている[3]。

津田は多くの教会に出入りし、そこで司祭のサポートをするなど、キリスト教に熱心にかかわった。たとえば、芝の聖公会の教会、築地にある日本人司祭による聖公会の教会などによく通った。津田の手紙の中にページ夫妻とガーディナー家という米国聖公会の宣教師の名前が頻繁に登場する。また米国聖公会であったコール司祭のサポートをしていることも確認できる[4]。どの宗派にもこだわりたくないといいながらも、聖公会が一番居心地よかったと考えられる[5]。

女子英学塾創設2年前のことであるが、1898年の秋、津田は渡英し、イギリス国王より社会的に認められていたカンタベリー大主教、ヨーク大主教に面会している[6]。このとき津田は自分の信仰のもろさや、学校創立の計画などで悩んでいたようだが、大主教に励まされ、私塾開設に正面から向かっていく決心が固まったと考えられる[7]。

1905年11月、津田は日本キリスト教女子青年会（YWCA）の初代会長に選ばれた。YWCAは女性の高等教育と「職業婦人」の教育と福祉を中心に女性の自立に力を尽くした機関であった。また、初代日本YWCAの総幹事となったキャロライン・マクドナルドは女子英学塾でも教えており、津田と20年にわたる交友をもっていた。1907年2月には女子英学塾キリスト教女子青年会の発会式が行われ、それ以後女子英学塾の生徒はクラブ活動のようにYWCAの行事に積極的にかかわった。

1913（大正2）5月、ニューヨークで世界キリスト教学生連盟大会が開催された際、津田はYWCAの代表として出席するために4度目の渡米を果たしている。そのときの演説「日本における福音」[8]で、日本はキリスト教を広めるためによい環境にあることを述べ、聖書の中の話を通してキリストの自己犠牲と博愛の精神を教えるべきであることを強調し、日本の若者のために必要なの

は最良で最高な「クリスチャニティー」であると述べている。

津田のキリスト教に対する考え方は、帰国したばかり、つまり18歳のときのランマン夫人に対する手紙からも確認できる[9]。ここには、来日した欧米の宣教師たちが皆自分の宗派にこだわるあまり、よい仕事をしていないことに絶望している様子、日本人司祭のほうが真面目で素晴らしいクリスチャンであること、また日本人のキリスト教徒こそがよい仕事ができることなどが書かれている。このように、高い給料をもらうわりに、よい教育を行っていなかった宣教師たちを高く評価しなかったためか、津田はミッション・スクールで教えることはあまりなかった。キリスト教を信じることは心の問題であると確信していた。

次に、女性の自立と地位向上にキリスト教をどう役立てようとしたのかを考察したい。津田は日本の風土を愛し、日本の精神を大切にしたいという思いを強く持っていた。その一方で、日本の「男尊女卑」的な社会を否定していた。そして、その根源は儒教と仏教にあると考えていた。女性の地位向上に儒教や仏教の教えが妨げになっていることや、女性の地位向上のためのキリスト教の重要性などを強調したことは、講演記事「日本人女性の教育」[10]によく表れている。以下にその内容の一部を紹介する。

> 古代日本の女性ははるかに自由があり、男性とほぼ同等の教育を受けていたと言われている。中世の習慣や、長期にわたる戦争や、古い封建制度、そして儒教が中国から渡ってきて、仏教がインドから渡ってきたことが影響して、日本の女性の地位も中国とインドのそれと変わらなくなった。（中略＝引用者）孔子は、女性は従順でなければならず、女性の意見は絶対に信頼できないという。いわゆる「三従」とは家にあっては父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うということである。幸い、日本で仏教と儒教の力は衰えてきた。その空白をキリスト教が埋めることを期待している。（中略＝引用者）社会の慣習は女性を二次的な地位に指定している。なぜならば、女性には責任のある仕事は任せられ

ない、女性は自分自身で思考するように育てられていないからだ。この害悪を矯正するのに二つのものが不足している。それはキリスト教と教育だ。

このように、津田は日本の女性の地位向上のために「キリスト教と教育」が不可欠であるであると断言しているのである。特に、キリスト教が日本人女性に及ぼす倫理面を強調した。津田はキリスト教に基づく女性の自立を考えていたとみることができる。

では、女子英学塾でキリスト教色はどのように表れていたのか、どのような実践が行われていたのか、次号で述べることとする。

---

[1] 1882年11月23日付の手紙。Yoshiko Furuki, et al. *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother*, Weatherhill (New York)、1991年、p14

[2] 吉川利一『津田梅子』、婦女新聞社、1930年、p256

[3] 1885年1月25日付の手紙。*The Attic Letters*、p177

[4] 1889年1月15日付の手紙。*The Attic Letters*、p326

[5] 「津田梅子とキリスト教」『津田塾大学一〇〇年史』、津田塾大学、2003年、p492

[6] 「Journal in London」『津田梅子文書』、改訂版、津田塾大学、1984年、pp263～344

[7] 山崎孝子『津田梅子』吉川弘文館、1962年、p167

[8] 『津田梅子文書』、英文、pp498～503

[9] 1882年12月17日付の手紙。*The Attic Letters*、p25

[10] 『津田梅子文書』、pp18～33

アクティブ・ラーニングに思う（承前）

小宮山（こみやま）　道夫（みちお）（広島大学）

（第16号の続き）

蓋を開けてみれば受講者数は65人。その内訳は1年生29人、2年生11人、3年生6人、4年生19人であった。部局別では教育学部生が31人で約半数を占め、次いで経済学部生11人、工学部生9人、理学部生7人、総合科学部生4人、法学部生3人となっていた。2年前に本講義の時間割を検討した際、すでに述べたとおり全学部学生の最大多数が受講しやすい時間帯を選択をしてした。特にこれまで時間割の都合で受講しづらかった医歯薬保健学系の学生の空きコマを優先的に考慮して申請したのであった。

しかしその申請から間もなく広島市内にキャンパスのある学生たちの教養教育を広島市内のキャンパスで提供することが決定された。瞬く間に新校舎が建設され、今年4月から広島市内で学部専門を学ぶ学生、具体的に言えば医歯薬保健学系の学生が東広島市のキャンパスから姿を消すこととなった。1学年約400人、約17%が想定していた受講生の分母から消えたのである。医学系の学生が取りやすいようにとの目論見は脆くも崩れ去った。策士策に溺れるとはこのことか。さらに迂闊だったのは、他の授業が入らない時間帯を選んだということは、わざわざこの授業のためだけに大学に来るような授業の取り方を学生はしたがらないということであった。20年以上前の、学生だった頃の筆者自身の経験を思い起こせば当然持ちあわせていたはずの発想を、いつの間にか忘れ去っていた。記憶の風化（美化？）とは恐ろしい。数人の受講生に話を聞く限り、指定授業の入っていない水曜の午後は空けておきたい、という話と、夕方に指定の授業が入っているので東広島には行けないという話が聞こえてきた。

さて、結果的にはグループワークの実施には程々の受講者数となった。登録65人なので実際に教室に来るのは50人前後だろうか。9班編制で約7人、

欠席者が出ても常時各班5人程度は確保できるだろう。班の発表も10分時間を与えれば1コマ内に納まる。アクティブ・ラーニングと呼べるかどうかは別としても、グループワークと学生が自ら考える方式の自校史授業の実現と相成った。従来の講義形式は10回に減らし、3回分をフィールドワーク、2回をフィールドワークの報告会とした。また講義形式の一部もフィールドワークの前週にはグループワークに基づく準備の時間を割り当てるように構想した。

班編成が最初の課題である。初めての授業の着席状態から切り分けて、とも思ったが、似通った受講意識の班員で構成されるのもためらわれたし、誰がどこの班と確認する作業も億劫だったので却下した。いっそのことランダムで、とも思ったが、せっかくの教養の授業で班員の学部が偏るのも勿体ない気がしたので、意図的に分けることとした。もちろん受講生の個性までは把握できないので、班員の構成が偏らないように、男女、学年、学部を勘案しながら分けるのみだが、適度にそれらを混ぜながら9班を編成するのは意外と手間がかかった（しかもミスで最終改訂直前の班分け表を印刷配布してしまい、一部の班は意図したとおりの班構成にはならなかった）。

強制的な班編成の学生の反応が気がかりだったが、思っていたよりも好意的な反応だった。違う学部や学年の学生と同班になってグループワークをすることは、苦労もあるが、その負担感よりも期待感を高めるようで、「何人かで一緒に勉強することで、効率の良さも上がりまた、楽しく学んでいくことができたので良かったと思いました。」というコメントが寄せられたり、「フィールドワークが始まるまで、班員もみんな初めましてで、何をしたらいいかさっぱりわからなくて、不安がいっぱいでした。最初は文献を探してみても、あまり役に立つような情報がでてこなくてとてもあせりました。でも、班のみんなで協力して、いい情報を探したり、最終的には先輩がとても頼りになり、なんとかテーマが決まり、とても良いフィールドワークになったと思います。」という感想が寄せられたりした。もちろん「1年生に任せて、楽をしようとしている上級生がいたので残念だった。」という苦情もあったが、滑り出しとしてはまずまずの手応えと言ってよいのではないだろうか。（続く）

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（18）
―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その2)―

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

前号では東京府立第一中学校長川田正澂が1920年（大正9）年に同校の校友会である学友会を法人化した際の演説を検討した。その演説では、川田校長は、イギリスのパブリックスクールのように確乎とした教育方針を継続できるよう、一種の私立学校のように、直接の寄付を集めて独自の教育を充実させたいという考え方を示していたことがわかった。

本号では、川田がイギリスの学校視察から、とくにイギリスのパブリックスクールを見て、どのような教育方針を着想していたのか、川田書いた文章を通して確認していきたい。

川田はイギリス視察中の書簡などをもとに、1914年に東京府立第一中学校学友会から『欧米教育雑感』をまとめ、それをもとに1917年には磯部甲陽堂から『教へる人学ぶ人』を刊行している。両書は内容上の重複が非常に多いが、より広く普及する目的をもって後者を出版社から出したのだろうと思われる。

両書には、1913年（大正2年）8月1日に英国滞在中の川田が生徒たちに向けて書いた書簡が「英国書簡其の二」として収録されている。その書簡のなかで、川田は英国の人格養成を重視する教育の秘訣が、生徒を信頼することにあるとして、次のように紹介している。

> 英国教育[1]主要の目的は、人格養成にあることは、先便に申上げたる所の如し。而して此の教育の秘訣は、一言にしてこれを云へば、生徒を信頼 trust するにあり。諸子はよく此の意味を了解せんことを望む。詳言せば、生徒を無能力者視し、之に干渉束縛を加ふるときは、其の意志の

力を弱め、独立心を阻礙し、責任の観念を薄からしめ、依頼心を助長するに至るべし。故に他人に迷惑を及ぼさざる限は、成るべく其の生徒自身の為す所に放任して、之を掣肘せず、其の過失は自己の良心に訴へて、之を匡さしめ候様致すべしと云ふことに候[2]。

川田は、生徒を信頼して干渉束縛しないことが、単なる生徒の勝手気ままを許すことではないとして、次のように述べる。

斯く云へば、諸子は己の欲する儘に、行動して善いと思はんも、そは大なる誤解にて候。例へば我が府立第一中学校には、自ら其の校風有之候。一旦此の学校に入りたる上は、何処までも此の校風に従はざるべからざることに候。而して之に従ふには外部の圧迫を待たずして、自ら進んで之に服従すべく、学校の規則なるが故に、いやいやながら従ふと云ふでは駄目に候。学生たるものの本分であるから、自ら好んで之を守ると云ふことならざるべからずと存候[3]。

干渉束縛でもなく、生徒の勝手気ままの容認でもなく、生徒がその学校の規則や慣例に自らの意志で従う教育が必要であるとする川田は、そのヒントが次のような英国教育の特色にあるとする。

英国にては学校長若くは教員より生徒に命令訓戒等をなすことは極めて稀にして、生徒は互に相戒めて校風に遵ひ、規律を守り、秩序を重んずることに御座候。彼等は自ら克ち、自ら治め、自ら其の責任を尽す事に御座候。彼等は愛校心極めて旺盛にして、学生の本分に悖り、学校の体面を毀損致候様の事は断じて不致候。彼等と学校長教員との関係は誠に円満にして。春風駘蕩、和気藹々たるもの有之候。彼の我が国に流行する同盟休校の如き忌まはしき事は、英国の学校にては曽てあら

ざる所と申す事に御座候[4]。

つまり、英国の教育では、生徒が「互に相戒めて校風に遵ひ、規律を守り、秩序を重んずる」といった自治的態度が見られるとしているのである。そして、川田は次のように述べ、今すぐということではないが、将来、東京府立第一中学校でも学校からの干渉ではなく、生徒の自治に任せるようになることを期待すると生徒たちに告げているのである。

余は我が府立一中が年を追うて校風確立し、生徒の自治自制に放任し得べき時の来らんことを切に祈るものに御座候[5]。

こうしたイギリスでの見聞に影響された川田校長の教育観が、東京府立第一中学校における校友会活動の方針にどのように関係しているのか、次号で引き続き検討していきたい。

1　他の箇所の記述から、イートン校などのパブリックスクールのことを中心に述べていると考えられる。

2　川田正澄『欧米教育雑感』磯部甲陽堂、1917年、19頁～20頁。

3　同前掲書、20頁。

4　同前掲書、20頁～21頁。

5　同前掲書、21頁。

≪お知らせ≫　学際シンポジウム　近代日本の日記文化と自己表象

田中祐介会員が代表をつとめる研究プロジェクトのシンポジウムが9月17日・18日にあります。堤会員と徳山会員も発表されます。詳細は以下の通りです。

学際シンポジウム　近代日本の日記文化と自己表象
―人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか―
2016年9月17日（土）、18日（日）
明治学院大学白金校舎、本館10階大会議室

アクセス
http://www.meijigakuin.ac.jp/access/
キャンパス案内
http://www.meijigakuin.ac.jp/campus/shirokane/
★同時開催「戦中戦後の日記いろいろ」展 「女性の日記から学ぶ会」協力

□9月17日（土）□

午前の部　10:00-12:05

総論1　日記という「行為」（田中祐介、明治学院大学助教）

セッション1：教育装置としての日記、規範化の力学における自己表象
「教育手段としての日記の定着―明治期少年の『日誌』にみる指導と規範」（柿本真代、仁愛大学講師）
「農民日記をつづるということ―近代農村における日記行為の表象をめぐって」（河内聡子、東北大学助教）
「まなざしの往還―生徒から教師への跳躍としての教育実習日誌」（堤ひろゆき、上武大学助教）

午後の部　13:05-18:30

セッション2：文学的テクストとしての日記
「堀辰雄における王朝日記の受容」（川勝麻里、明海大学ほか非常勤講師）
「日記は権力を乗り越えうるか―北條民雄と検閲」（大野ロベルト、日本社会事業大学助教）
「性をめぐる教化・窃視・告白―ジュニア向け文庫の〈非行少女の日記〉を中心に」（康潤伊、早稲田大学大学院博士後期課程）

セッション3：外地における日記、自己表象とアイデンティティ形成
「境界をまたぐ身体―戦前満洲の学生日記にみる中国人青年の学校生活と都市経験」（高媛、駒澤大学准教授）
「ふたつの言語、ひとつの日記―植民地台湾において日記を綴ること」（大岡響子、東京大学大学院博士後期課程、国際基督教大学アジア文化研究所準研究員）

セッション4：「近代日本の日記文化」を浮き彫りにし、相対化するために
「近現代タイの日記文化」（西田昌之、チェンマイ大学専任講師）
「日記研究の日欧比較の一視座―心理療法学を学んだ経験から」（宮田奈々、オーストリア科学アカデミー近現代史研究所客員研究員）
「前近代の日記の"発生"について―比較文化史の視点から」（松薗斉、愛知学院大学教授）

特別対談「個人の記録を社会の遺産に」（島利栄子、「女性の日記から学ぶ会」代表）
聞き手：田中祐介

□9月18日（日）□

午前の部　10:00-12:00

総論2　日記という「遺産」（田中祐介、明治学院大学助教）

セッション5：教養共同体における読書と日記
「読書文化の桎梏と日記―役人の教養と鬱屈」（新藤雄介、福島大学准教授）
「多声響く〈内面の日記〉―第二高等学校『忠愛寮日誌』にみる戦時下キリスト教主義学生の煩悶吐露と炎上的論争」（田中祐介、明治学院大学助教）
「学徒兵の読書日記―学徒兵遺稿集と阿川弘之『雲の墓標』をめぐって」（中野綾子、早稲田大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員PD）

午後の部　13:00-17:40

セッション6：歴史資料としての可能性
「歴史資料としての病床日誌―陸軍病院における事例を中心に」（中村江里、一橋大学特任講師）
「銃後日記から「国民意識」をみるということ」（梅藤夕美子、京都大学大学院博士後期課程）

セッション7：〈女学生〉の文体獲得と書記行為
「少年少女雑誌にみる作文と文体」（嵯峨景子、明治学院大学非常勤講師）
「奈良女子高等師範学校生の詠み書きと「自己」表象―大正大典奉祝歌と校友会誌掲載歌をめぐって」（磯部敦、奈良女子大学准教授）
「〈女学生〉の書記行為を再考する―白河高等補習女学校生徒の日記帳と佐野高等実践女学校校友会誌から」（徳山倫子、京都大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員DC2）

総合討論

■参加費無料、どなたでもご参加頂けます
■事前申し込みは不要ですが、配付資料の準備の都合上、ご参加の旨をご一報頂けると助かります：nikkiken.modernjapan［アットマーク］gmail.com（代表：田中祐介）

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

世界に影響力ある100人（2007年）にも選ばれている理論物理学者＠ハーバード大初の女性終身教授リサ・ランドールさんは、著書『宇宙の扉をノックする』（2013年）のなかで、研究の創造性について次のように述べています。「研究は何もないところから出てくるものでもない。すでにそこには、ほかの人々が考えてきた多くのアイデアや洞察による豊穣な地盤があったのだ。よい科学者は、別の科学者の意見にも耳を傾ける。時として適切な問題や適切な解答は、他人の仕事をとても注意深く、見たり聞いたり読んだりすることによって見つかるものだ。…科学者はつねにアイデアを交換しながら、帰結を導き、修正を加え、それで最初のアイデアがうまくいかなければ最初からやり直す。新しいアイデアを想像し、そのいくつかを保持して、いくつかを捨てる…そうやって私たちは前進する。」（「思考は広く、実行は細かく」560～561頁）。なるほど、そのとおりかな。（谷本）

いよいよ夏本番です。夏になったら○○をしよう、○○をやらねばと考えていながら、実際なかなか思い通りにならないものです。絵に描いた餅が毎年の恒例になりつつありますが、人生もかくのごとくならぬよう自省する毎日です。（金澤）

先日、東京工業大学に資料調査に伺いました。同校は『百年史』によると学長八木秀次の在任期間中の1942(昭和17)年から1944(昭和19)年までに、大学発足当初から懸念であった大学予科設置を文部省に働きかけていたようです。博物館史資料館の方にはたいへん親切に史料を探していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。(山本剛)

危ういながらも創刊以来続けてきた原稿を先号はついに落としてしまいました。連続記録は途絶えてしまいましたが、「取り返しのつかないことになってしまって」と嘆いたり、引退を考えたりせず、頑張って欲しいと思います。あ、今号も締切後の原稿だということがばれてしまいました。頑張ります。(小宮山）

30年以上振りに開催された高校1年生のクラス同窓会に参加してきました。当時担任1年目であった恩師が、どのような校内外の状況のなかで、どのように考えてクラスを指導しようとしていたのか、そしてその1年間がその後の教育活動にどのように影響を与えたのか、色々話を聞くことができ、出身校の歴史を改めて振り返ることにもつながりました。（冨岡）

本ニューズレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使って A4 サイズ両面刷りにすれば、ちょうど A5 サイズの小冊子になります。